奈良・大和を愛したあなたへ

私と祖母と執金剛神

今からもう何十年になるでしょうか、私の幼児のころのこと、昭和七・八年頃のことでしょうか、お正月前の五却院へご先祖の墓参りに行った帰り道、私は祖母と一緒にいつも通り正倉院の裏の松風の音を心地よく聴いて二月堂へとお参りしました。南の石段を降りて来たとき、何時もは閉ざされている法華堂の北の扉が開かれていたのです。祖母と供に近くに寄って見ますと、目の前にはいかめしく強そうな仏様、その左腕あたりに見えた今まで見たこともないような鮮やかな赤と緑の美しい着衣にはっとしたとき、祖母は「この仏さんはな、将門の乱の時に蜂になって飛んで行きなはった、そして敵をこらしめはったんや」と語ってくれました。何とも不思議な気持ちでお姿を直に拝み見ることができました。

それからすっかり忘れ、奈良の地を離れて時が経っていました。

ところが、私は六十歳を迎えて勤めを終えましたら、途端にそれまで想いだしても見なかった幼児の頃のすべてが生き生きとまるで幼児の私が見ているかのように蘇ってきたのです。溢れるように家の中の情景が映り、家人が家事に勤しむ姿、四季折々の家の行事、表に来る物売りの情景、近所の人々などで頭の中が一杯になりました。その次につづいて出て来たのが祖母と見たあの仏様でした。左腕のあたりに見えた鮮やかな赤と緑の美しい色が妙にはっきりと浮かび出てきて力強そうなお姿と祖母の語ったことばが蘇ってきました。

それからというものは、蜂になって飛んで行かれたのは果たして何の戦だったのかしら、（幼い時ですから何の乱とは分からず覚えていない）それにあの美しい赤や緑は．．．．との想いがつのってもう一度拝みたい、そして私の幼児のときの記憶を確かめて見たいと思う気持ちが強くなりました。

はからずも、年に一回ご開帳のあることを知りました。平成十九年十二月十六日、私はときめく思いで出掛けました。時雨れのかかる寒い日でしたが法華堂や開山堂の前にはずらりと人の列、北側と思って廻ってみましたが扉は閉まったまま、執金剛神像拝観の方はこちらへと聞いて法華堂前の人の列の後ろにならんで案内文を読みました。そこで平将門の乱と分かり、天慶２～３年（９３９年～９４０年）の将門の乱の折り、執金剛神像の前で将門誅討の祈請を行ったところ、大蜂となって東方へ飛び去り将門を刺して乱を平定したと伝えられているとのこと、．．．．私は人の列につづいて堂の後ろへと導かれました。執金剛神を目の前に、幼児の目にはもっと大きい仏様と映っていましたが、今目の前には思いの外私より少し大きいお姿でお厨子の中に祀られていました。左腕には幼い時に見たのと変わらない鮮やかな美しい赤と緑がありました。腕のみではなくて、かっと開いた口や胸や膝の当たりにも美しい色が残って威厳あるお姿でした。厨子の扉の内側には蜂になって飛び去る絵がありました。改めて祖母のことばも思い浮かべて今ここに拝する喜びで感慨無量の思いでした。

幼い日に一瞬まみえた東大寺法華堂の仏敵を護る執金剛神の厳かで幼な心を和ませ引き付けた不思議な霊感が、長い間私の内にとどまっていて下さった仏縁の喜びを深く感じるのです。そして奈良大和の諸寺の行事や仏様をこよなく愛し供に生き暮らしていた奈良の

一住民、私の祖母の思いを汲んで感謝と幸せを今一層かみしめているところです。
今の季節、東大寺のお水取り中にも三月七日には「小観音さんや」といってお参りをかかせなかった祖母を通して二月堂の観音さまからの何とはなしに感じる温かいオーラと、秘仏執金剛神にはじめて出会ったあの日から私に向けて真っすぐにいただいているふしぎなオーラにすがって私は、これからも手を合わせてすごして生きたいと思っています。

山田　　定

執金剛神立像　（写真　入江泰吉）